

# Accounting, Arithmetic & Art Journal



The **PACIOLI SOCIETY JAPAN**

1995. 03

1494年11月10～20日ヴィネツィアのパカニーノ・デ・バカニーニ印刷会社からルカ・パチョーリ著『スママ』(Summa de Arithmetica Geometria Propotioni et Proportionalita)が出版されてから1994年は数えて、500年周年を迎えた。周知のように、この著作はその後の経済社会に計り知れない影響を与えて来た。

この認識のもとにイタリア大使館は、秋晴れの11月11日、蔦がからまる瀟洒な東京・九段のイタリア文化会館に、パチョーリ所縁の研究者や簿記会計に携わる方々250名程度を招待して、パネルディスカッションと祝賀晩餐会を催した。パオロ・ガツリ駐日イタリア大使の開会の辞に始まり、この日のために来日したサンセポルクロ市立図書館長コマンドッチ氏から「ボルゴのルカ・パチョーリ」と題する講演があった。通訳には館長とは親交の深い片岡泰彦教授(大東文化大学)があたられた。会場には江村 稔、岸悦 三、中西 旭氏などのパチョーリ研究者の他、パチョーリ協会の面々が多数列席した。

メイン会場に隣接したパーティ会場には、『ルカ・パチョーリの生涯と作品』と題する16枚のパネルが展示されている。これらはイタリアから空輸されたもので、パチョーリが紹介し工夫した数学知識や、その著作を広範囲に知らしめることとなった印刷技術の紹介、そして彼の著作、特に組織的簿記と『ディヴィーナ・プロポルツィオーネ』に関する貴重な資料が集められ解説されている。

シンポジウムでは各パネラーたちの発言に続き、フロアーから活発な質疑応答があつて、出席者全員が和やかに懇談する晩餐会を迎えた。イタリア大使館の科学技術参事官カルロ・エッラーニ氏の閉会の辞をもって500周年記念シンポジウムは閉会した。

(上記記事は大原学園『スペルード』No.24を参考としました。)

1994年1月21日、明治大学にて、パチョーリ協会の幹事と監事が集まり、会務運営につき検討しました。その結果、従来の「幹事」は名称を「世話人」と改めるとともに、担当者も増員することとし、世話人ならびに監事は次の通りいたしました。

世話人:岡本治雄 佐々木重人、鈴木一道、三代川正秀

監 事:種田勝正 松井隆幸



はじめに

専修大学で生理学と科学史を担当しております本田でございます。本日はパチョーリ協会第5回フォーラムにお招きいただきまして、まことに光栄に存じます。フラ・ルカ・パチョーリが生を享け、活躍されましたのは、15世紀から16世紀にかけて



まして、まさにルネサンス華やかかなりしころであります。ルネサンスという桧舞台で、パチョーリは千両役者のひとりとして業績を残したわけですが、私がこれからお話しさせていただこうというのは、その桧舞台の舞台背景のひとつについてであります。

我が田に水を引いて恐縮であります。科学と技術、とくに医学と医療に焦点をしばりまして「パチョーリの時代」を振り返ってみたいと思います。

§ 1 パチョーリの時代

(1) まず Fra Luca Pacioli (1445～1517) と同時代を生きた人を挙げてみましょう。Machiaveli (1469～1527)、Copernicus (1473～1543)、Martin Luther (1483～1546)、芸術家では Verocchio (1436～88)、Botticelli (1444～1510)、Leonardo da Vinci (1452～1519)、Michelangelo (1475～1564)、Raffaello (1483～1520)らが輩出、Columbus (1446ころ～1506)や Vasco da Gama (1469ころ～1524)などが新航路を開拓して、ヨーロッパ人の世界を急速に拡大してゆきました。

<Pacioli の時代略年表>

1445	Pacioli	*1494(Summa)	1517
1389	Cosimo de' Medici		1464
1449	Lorenzo de' Medici		1492
1451	Lodvico Sforza		1508
1564	Galileo Galilei		1642
1469	Machiveli		1527
1473	Copernicus		1543
1483	Martin Luther		1546
1436	Verocchio	1488	1510
1510	Ambroise Pare	*1545「銃創療法」	*1564「外科学 10 巻」1590
1444	Botticelli		1510
1452	Leonardo da Vinci		1519
1481	Marcantonio della Torre		1512
1475	Michelangel		1564
1483	Raffaello		1520
1514	Andreas Vesalius	*1543「人体の構造」	1564
1446?	Clumbus	*1492 アメリカ発見	1506
1469?	Vasco da Gama	*1498 インド航路発見	1524
1483	Girolamo Fracastoro	*1530 Syphilis, *1546「接触伝染病」	
1460	Giovanni da Vigo	*1514「実用外科書」	1519

(2) 次に、科学や技術を中心としましてパチョーリの時代を概観しますと、すでに 1415 年、ポルトガルの王子 Henrique が、ザグレスに航海・地図研究所を設立しまして探検航海を奨励しましたが、これが大航海時代の扉を開くことになりました。ヴェネチアで造船業が興隆するとともに、Regiomontanus がニュルンベルクに天文台を創設し、航海暦の作製に着手するなど、科学的基盤を持った航海が始まります。

しかし、Columbus 船隊が西インド諸島から持ち帰ったお土産のひとつは、梅毒でした。

1493年から、激症の梅毒がヨーロッパで大流行し、たちまちアジアへも伝わりました。中世からルネサンス時代にかけて、ヨーロッパでペスト、天然痘、発疹チフス、インフルエンザなどの伝染病が流行を繰り返しましたが、ニューフェイスの梅毒の出現には、医師も一般人も大いに悩ませられたようです。

また、ルネサンス時代に活躍した芸術家たちは、人体解剖に熱中しました。その代表は Leonardo da Vinci でした。彼らは、絵画や彫刻に人間そのままの姿を描き、表現しようとねらって、そのためには人体の構造を正確に知ることが先決だと考えたのです。ここに、ルネサンスの新しい息吹が感じられます。

この時代、大小の戦乱が各地で起こりました。ここでも、新顔の創傷が登場してきました。火薬を使った小銃や大砲が実用化されて、従来の刀剣、槍、矢によるキズとはかなり様子の違う、弾丸やその破片による負傷者が続出してきたのです。外科治療の領域で、この銃創に対する処置が課題として浮上してきました。

このように、「パチョーリの時代」を科学技術の面から簡単に展望しましたが、数多くの問題のうち、人体解剖と梅毒と銃砲による創傷の3点に焦点を定めまして、お話しを進めたいと存じます。

## § 2 人体解剖学の革新

### (1) 解剖学の rinascita(再生)

医学の歴史の中で人体解剖学はどのように取扱われてきたかを顧みますと、メソポタミアや古代エジプトでは解剖をしませんでした。多くのミイラが残されていますが、これは専門職人の仕事で医師は全く関係していません。Herodotos は『歴史』の中でミイラの作り方を詳しく記載していますが、金持ち用と貧乏人用ではミイラの作り方が違い、やはり当時もセチがらなかったようです。古代ギリシャでは名医 Hippokrates とその学派が活動しましたが、解剖はしていませんでした。

ヘレニズム時代に入って、アレクサンドリアで医学史上初めて人体解剖が公認され、ムーシオンと命名された学術研究センターには解剖研究室が特設されました。

Herophilos や Erasistratos らがさかんに人体解剖をして、神経学などの領域で新知見を得ています。しかし、古代ローマ時代から中世にかけて、人体解剖は再び厳禁されました。14世紀ころになりますと、イタリアの医科大学で年に1~2体の解剖が特別許可され、学生や一般市民に供覧されました。単なる供覧で、新しい知見を得ようという学術研究のための解剖ではありませんでした。

そこへ、親しいものの見方で人体解剖に取り組もうとする人たちが出現しました。その先頭に立ったのは画家や彫刻家たちでした。絵画や彫刻に人体の本当の姿をうつし出すためには、筋肉の走り方や骨格の様子から始まって人体の構造を正確に把握することが大切です。彼らは教科書に掲載されている解剖図ではなくて、人体の仕組みを実際に自分の目で観察してとらえようと努力しました。アレクサンドリア時代に興隆した人体解剖学の精神が、Giorgio Vasari 風に表現しますと、まさしく rinascita したと言ってもよいのではないのでしょうか。人体解剖に興味を持った芸術家たちの代表が Leonardo でありました。

### (2) Leonardo da Vinci の貢献

Leonardo は晩年、フランス王国に招かれてイタリアからフランスに移住し、アンボワーズ城の近くにあるクロ・リュセで研究に従事し、そこで生涯を閉じました。この館を訪れた高官に、彼は「20 数年の間に男女の死体 30 以上を解剖した」と回顧しています。14歳のとき、フィレンツェへ行き Verocchio の徒弟になりましたが、その工房にいるときに初めて人体解剖を見学したよう



です。Lodovico Sforza に招かれた第1次ミラノ滞在中(1482~99)に、自分の手でメスを持ち人体や動物の解剖に熱中し始めましたが、フィレンツェ(1500~06)にもどるとわざわざサンタ・マリア・ヌオヴァ病院内に住居を構えたほどでした。人体も手に入れやすく、また解剖もしやすいからです。

Leonardo も最初は芸術的な動機で人体の構造に関心を持ったのですが、間もなく科学的興味が急激に高まり、人体解剖学の探求そのものへと、のめり込んで行きました。彼は解剖学・生理学教科書をまとめようと志ざし、パドヴァ大学の Marcantonio della Torre(1481~1512)と共著で出版を企画しました。Leonardo

は、自分の目で観察したままの解剖図を描いて行きました。彼の構想を聞いてみましょう。

「この著作は、人間の妊娠をもって始まらねばならぬ。そして子宮の様子、胎児がどのように住まっているか……栄養をとる方法、その成長……何ものがかれを母体の外へ押出すか……。次に赤ん坊が生まれた後、満1歳の赤ん坊を計測して、他の肢体より早く成長するのはどこか、を調べよう。次に青年の男子と女子、その身長、体重、および容貌・色・人相の性質を書け。次に、いかに人間の血管、腱、筋および骨から構成されているかを述べよ」。

こうなれば、Leonardo は立派な解剖学者であったと言ってもよいでしょう。ところが、不運にも、共著者の Marcantonio が伝染病で急死したため、この著作は実現しませんでした。しかし、彼は美しい図と手稿を数多く残しています。現存する解剖手稿は、約 800 枚であります。その解剖図を調べますと、彼がとくに関心を注いだものが何か、がよく分ります。

Leonardo はとくに心臓と血管に興味を持ったようで、心臓を開き、断面を作り、弁を精細に調べて、それまでになかった正確な図を描いています。心臓から出る大動脈の根部にある弁の性質と働きを実験で確かめ、弁は一方方向にだけ血管を流し、逆流を防止するものだという正しい結論を導き出しています。

また、筋肉は付着した骨をどのように動かすか、という人体の運動について調べ、歩くとき、物を投げるとき、持ち上げ運ぶときなど、どの筋肉がどのように動くか、と生きている人体の動きを常に念頭に置いているのが彼の特徴です。死体の解剖ではなくて、Leonardo にとってはあくまで解剖・生理学であったのです。

彼の著書の構想は発生学から始まっていますが、早くから興味を示したのが、子宮内胎児の発育です。子宮の中にある赤ちゃんの図は、希に見る美しさを示しています。もしも、Leonardo と Marcantonio 共著の解剖・生理学書が実現していたならば、どんなにか素晴らしい教科書が出来上がり、医学史に画期的なモニュメントを築いたに違いありません。

### (3) Vesalius の『ファブリカ』

Leonardo の念願を実現したのが、ブリュッセル生れのパドヴァ大学教授、Andreas Vesalius (1514~64) でした。Vesalius はパリ大学医学学部在学中、深夜墓地に忍び込んで人骨を集めるほど解剖に熱中した人物で、さらにパドヴァで学び、23歳で解剖学・外科学教授に任命されたという俊秀でした。

従来、医科大学における解剖学講義は、高い講壇の上から古典的教科書を講釈し、解剖台のそばで身分の低い理髪外科医がメスを持って解剖を進めて行き、学生に供覧するというやり方を続けてきました。ところが青年教授 Vesalius は、講壇から下りてきて解剖台のそばに立ち自分の手でメスを執り、解剖しながらその所見を実地教授しました。また、講堂に人体解剖図を掲げて学生の理解に役立たせようとしたので、たちまち学生の大歓迎を受けました。



Vesalius も最初はローマ時代の名医 Galenos の教科書に基づいて講義を進めましたが、やがて自分の目で解剖所見を確かめるにつれ、Galenos は動物体の所見をそのまま人体に移した点が多く、記載に誤りが多いことに気が付きました。そこで彼は、自分の目で観察したままの人体解剖学書をまとめようと志ざし、寝食を忘れて解剖に没頭しました。その成果をまとめて、1543 年に大著『人体の構造についての七つの本』(De humani corporis fabrica Libri septem、略称「ファブリカ」)を刊行し、初めて系統的な人体解剖所見を世に示しました。

『ファブリカ』第1の本(現在なら第1章)では骨と関節、第2は筋肉、第3は血管、第4は神経、第5は内臓と生殖器、第6は心臓と肺、第7は脳と感覚器を取扱っています。解剖図は、同郷の画家 Jan Stefan van Kalkar の協力によって、図自体がそれぞれ立派な芸術作品と言えるまでに仕上げられています。とくに骨格や筋肉を解説する際、人体は多く立位の姿勢で生き生きと描かれ、背後にはパドヴァ郊外の美しい風景が添えられるという、全く新鮮な解剖図が豊富に掲載され、バーゼルの印刷業者 Oporinus の製本技術と相まって、ルネサンスにおける最高水準の豪華本でありました。

「構造」という言葉を自著の題名中に使っていますが、この中に彼の人体に関する基本的な考え方が

示されているように思えます。それは、人体の動き方、働き方を重視して“生きた解剖学”をねらっているということ、さらには機械の構造と同じように、個々の部品を組立てることにより動くものが出来上がると考える、彼の哲学を物語っているように思えてなりません。たとえば、手の骨を示すとき、手を構成する数多くの小さな骨を、個々に精密に描いています。根源的にさかのぼって、個を明確にしようとする態度が、従来の解剖書と違ってありありと認められます。Leonardo もその傾向がありました。彼らには共通して還元主義とも言えるような考え方があらわれています。

この大著を刊行したとき、Vesalius は 29 歳でした。心血を注いだとはいえ、全巻すべての分野で図と解説が正確というわけではありません。しかし、古典的権威の Galenos を批判し、解剖学の基礎はまず自分の目で良く観察することにあると力説したことは、人体解剖学の革新者と呼ぶにふさわしい勇断でした。『ファブリカ』は、近代解剖学の扉を開ける記念すべき書物となって、医学の歴史を刻み込まれました。

### § 3 梅毒の大流行

#### (1) Columbus の西航

大航海時代を出現させた技術的基盤は、造船技術や航海技術の進歩です。堅牢な大型船が作れるようになり、3本マストに大きな帆を張り、操帆の工夫も巧妙になったこと、それに羅針盤の実用化、海図や地図、航海暦などの登場、天体観測器の発明などが相ついで、ヨーロッパ人は大洋に進出して世界を広げて行きました。

「薬味と香料の国」へ直接に到着しようと、アフリカ南端まわりで東洋への航路開拓に熱心なのは、ポルトガルでした。ところが、フィレンツェ人の Paolo dal Pozzo Toscanelli (1397~1482) は、「地球は丸いようだ。“暗黒の海”をどこまでも西へ進めば、東の国カタイやインドに着くはずだ」と考え、1474 年、ポルトガル王に手紙を送り、大西洋西航ルートの開拓を進言しました。しかし、ポルトガルはアフリカ南端まわりに熱心でしたから、この説を採用しませんでした。

Toscanelli の説に感銘したのが、Columbus でした。すぐに Toscanelli と連絡をとり、ポルトガル王へ送った地図と同じものを入手しました。この地図では、ヨーロッパから西まわりでアジアまでの距離は約 4000 キロメートルとなっていました。Columbus は「アフリカまわりよりも、はるかに短時間で東方の国へ行ける」と考えました。もちろん、この地図には南米アメリカ大陸は書いてありませんし、Toscanelli は地球の大きさを実際の約4分の1に小さく計算していたのです。この間違いが、Columbus の決意を固めたのですから面白いものであります。

彼はスペイン王室の援助で、サンタマリア号など3隻の船と 150 人の乗組員を得て、カナリア諸島から一路西へ向かって航海、へ向かって航海、1492 年 10 月 12 日、現在のバハマ諸島に到着し、そこをサンサルバドルと命名しました。Columbus は、あくまでアジアに到着したと確信していたようです。

#### (2) 梅毒のお土産

梅毒の起源について、古くからヨーロッパにあったとする説と、アメリカから伝来したとする説があり、長く論争されてきましたが、最近ではアメリカ説がほぼ認められています。Columbus の第1回航海のとき、イスパニオラ島(現在のハイチ)に上陸した船員が、この島に古くから存在した梅毒に感染したといわれています。翌 1493 年、彼らはスペインのバルセロナに帰ってきましたが、たちまち広がったのが梅毒です。

さらに翌 1494 年、フランス王 Charles 8世がイタリア遠征軍を編成し、各地から傭兵を募集しました。参加したスペイン兵士の中に、多くの梅毒感染者がいました。フランス軍は連戦連勝、ついに 1495 年にはナポリを占領しました。しばらくして、ナポリで梅毒が爆発的に流行しました。この病気は、当時まだ名前がなく、イタリア人は「フランス病」と呼び、フランス軍の方は「ナポリ病」と称していました。これは、多くの性行為の際に感染するということが分かり「恋愛病」と名付ける人も出てきました。当時の軍隊は、手配師によって集められた傭兵が主力でしたから、各地で遠慮会釈なく性行為に及んだことでしょう。こうして梅毒は、15 世紀末ころにはヨーロッパ全域に広がりました。

ハイチの住民の間では、梅毒は比較のおだやかな症状ですんでいたのですが、ヨーロッパ人に感染した場合は激症を示しました。著名な発疹、ゴム腫、軟骨がとけて鼻がぺしゃんこになる……という典型的な症状があらわれたようです。ルネサンスはまた、梅毒の時代でもありました。

治療法として、よく用いられたのは水銀燻蒸法とグアヤックの服用です。タルの底に網を敷、患者はタ

ルの中に入ります。網の下で、水銀を入れた容器を火で熱し、水銀の蒸気を身体に阿比留と言うのが、燻蒸法ですが、かえって激しい水銀中毒を起こして死者も出たことでしょう。グアヤックは、西インド諸島原産の木ですが、現地住民がその樹皮を梅毒治療に用いていると伝えられ、ヨーロッパへ盛んに輸入しました。樹皮を削り、煎じ薬にして 30 日間飲み続けるというものです。ルネサンス時代を代表する医師のひとり、Paracelsus は無効なりと力説しましたが、グフヤックの独占販売で財を成した Fugger 家は、宣伝広告を続け、ほぼ 100 年間も梅毒の特効薬としてもはやされました。

### (3) 羊飼いの Syphilis

ヴェロナの医師 Girolamo Fracastoro (1483~1553) は『接触伝染病とその治療』を刊行し、その中で「伝染病には、急速に繁殖して数を増す“病気の芽”がある。この目に見えない、驚くべき能力を持つ病気の芽が、直接、間接に人体から人体へと伝播する」と、初めて伝染病の病原体について論じています。まだ顕微鏡のない時代に、彼はこのような理論に到達したのです。

間差に達見の研究者と称すべきですが、同時に Fracastoro は詩人であり、作曲家出もありました。多くの詩を書きましたが、そのなかに「Syphilis」という作品があります。Syphilis という名の羊飼いが、慢心して神にそむき、その罪として忌まわしい病気をもらいました。その病気の症状と経過が詳細に描写されていますが、それは梅毒そのものの症状と経過でした。それで、フランス病とかナポリ病、恋愛病など、あだ名で呼ばれていた梅毒は、羊飼いの名をいただいて Syphilis ということになりました。

なお、梅毒は大航海時代の進展とともにアジアへも広がり、1498 年にはインドで流行し、16 世紀初頭には中国広東で大流行しています。1512 年には日本にも伝来しました。ヨーロッパ人が日本に初めて上陸したのは、1543 年に種子ヶ島に漂着して鉄砲を伝えたポルトガル人ですが、すでに梅毒はそれより 30 年早く日本に着いていたのです。

## § 4 鉄砲の登場

### (1) 銃創火薬中毒説

硝石と硫黄と木炭を混ぜて火薬を作る方法が、中国で開発されました。この方法が、シルクロードを経由してアラビア世界に入り、やがてヨーロッパへ伝来しました。花火大会だけでなく、鉄の筒に火薬を込めて爆発させ弾丸を飛ばそうと考えた人たちが、鉄砲や大砲を発明しました。

ルネサンス時代の実戦でたちまち花形となりましたが、戦場の兵士には恐ろしい武器でした。槍や刀剣、弓矢などによる負傷には、長年の経験でその治療法にも見当がつかいましたが、弾丸やその破片による創傷には外科医や兵士もとまどいました。イタリアの外科医 Giovanni da Vigo (1460~1519) は、弾丸は火薬の爆発力で飛んでくるのだから、それによって出来た傷は火薬の影響を受けるはずだと考え「銃創火薬中毒説」を唱えました。消毒法として、煮え立つ油を傷口に注ぎ込むのがよいと推奨しました。

この方法がヨーロッパ各地で常用され、兵士は負傷の苦しみだけでなく、この処置で悲鳴を上げざるを得ませんでした。「悲鳴が大きいほど生き延びる可能性が高い」と称されたのですから、兵士は二重の苦しみに泣いたのでした。

### (2) Pareの軟膏

フランスの外科医 Ambroise Pare (1510~90) も、しばしば軍医として出征し負傷兵の治療に当たりましたが、傷に注ぎ込む油が切れたという偶然の機会に、卵黄とバラ精油などを混ぜて作った軟膏を傷口に塗布したところ、きわめて良好な結果が得られました。

Pare は早速『銃創療法』(1545 年) をまとめて、苦痛の少ない温和な療法を発表して外科学に新風を送りました。

また、当時は四肢切断術が気軽に実施され、切断された手足の断端の止血法として、焼きゴテによる焼灼法が使われていました。Pare はこれをやめ、断端の動脈を二重の絹糸でくくるという血管結紮法を考案して、外科手術の術式を画期的に改良しました。

このように Pare は、従来の粗雑な手術を改善し、解剖学を基礎とした科学的外科学への扉を開きました。外科学の革新者 Pare は「私が彼に包帯した。神が彼を治し給うた」と弟子に教えた謙虚で高潔な人物でありました。

以上お話しさせていただきましたように、ルネサンス時代には医学・医療の分野で目覚ましい革新がな

されました。本日は、フラ・ルカ・パチョーリが活躍しました時代のひとつの舞台背景としまして、医学にまつわるエピソードをご紹介申し上げます。ご静聴たまわりまして、心から感謝申し上げます。〈終〉

(略年表は、1994年11月5日専修大学神田校舎での講演の折に配布されたものを、本誌収録のため加筆したことをお断りします。)

※ 絵画説明文

## ピエロとパチョーリの光景

Piero della Francesca e Luca Pacioli



ルカ・パチョーリ生誕の地・サンセポルクロの市庁舎（Palazzo delle Laudi）内の市長室に Angiolo Tricca 作とされる「盲目のピエロ・デルラ・フランチェスカのパチョーリに教授する風景（Piero della Francesca e Luca Pacioli）」（縦 94 cm×横 171 cm, 1850. ?）があります。すでにこの絵画は片岡泰彦教授が「世界最初の複式簿記文献」（雄松堂 PINUS No. 29, 1990）の中で紹介しています。絵画中央のピエロ・デルラ・フランチェスカが左手・白髪のパチョーリに幾何学を講義し、向かって右側にいるロムピアジ家（Antonio de Rompiasi）の三人の子息たちが二人の会話に聞き入っている、処である。そこでこの絵画は三つの場面に分解できる。

### <左側…キャンバスに何やら書き取る白髪のパチョーリ>

ゴシック調の丸テーブルとそれと対になる木製椅子との間で、パチョーリはピエロの説明をキャンバス紙に書き取りながら、左手にコンパスを下げ、立ちつくす。僧服に似た青黒い服に腰紐（フランシスコ会士の場合は清貧、純潔、従順の誓いを示す）を下げて、身体を左手キャンバス側に向けて、顔は右側やや下向きに師ピエロに対してしている。

キャンバスの下に紙束が散らばり、丸型の飾りテーブルの上には地球儀や燭台（？、神の導き、Lucia は光を意味する）と二冊の書物が置かれている。上方には石膏製の女性の胸像、恐らく、フィレンツェのバルジェッロ国立美術館所蔵となるウルビーノ侯フェデリコの妻バッティスタ像と思われる、があり、その右、パチョーリの頭上にはピエロの初期代表作「キリストの洗礼」（1440～1445頃）が掛かっている。これはサンセポルクロのサン・ジョヴァンニ・バッティスタ小修道院のために描いたもので、今はロンドン・ナショナル・ギャラリー所蔵である。背後の壁紙の様子はイタリア各地の都市国家の紋章らしい。

### <中央…講義に夢中な盲目のピエロ>

ベージュ色の貫頭衣を着て白い帽子をかぶり、皮製の背もたれのある椅子に座るピエロは左手に木製の粗末な杖を、右手は宙にあつて背を屈めて何かを説明している。スリッパらしいものを履き、絨毯の上に足を置いている。頭上に四本（教会博士のアリゴリー）の蝋燭（キリストを象徴する）を立てたシャンデリア（知識の光源、英知の象徴）が浮かび、頭上には不鮮明な絵画が「キリスト

の洗礼」の右隣りに並んで掛かっている。その絵画とピエロの間に棚があり、砂時計（時、無常、生死の循環、天と地）、ガラス製（明るく透明なので純粹の象徴）水差し、金メッキ製らしい皿（聖体のパンを入れたパテナ、最後の晚餐に用いたものを象徴する）などが置かれ、金属製水差し（手を洗うことは無垢と純潔を象徴する）が吊されている。

### <右側・説明に聞き入る三人の子供達>

ピエロの右側には大きな角テーブルがあり、その右側で裕福そうな三人の若者が二人の会話に聞き入っている。ピエロ側のテーブルの角には恐らくピエロが講義の合間に舌を潤しているのであろう、スプーンが入ったスープ皿がある。テーブル中央にはガラス製の花瓶（空瓶は魂の抜けた肉体を象徴することがある）と数冊の本が置かれている。『スママ』とおぼしき書物も含まれている。奥の子供は講義を聞きながらコンパスを回し、中腰の青年は左手にパレットに絵筆とキュー（？）を持ち、右手はピエロの説明をなぞるように宙にある。タイツを履いて深ぶかに座り込む男の子は誇らしげに腰からポシエットを垂らしている。この子達こそパチョーリがヴェネチアでの6年間ロンピアジ家で家庭教師として教えた Bartolo, Francesco そして Paolo であろう。1470年にパチョーリ（25才）がこの家を去る折に A Manuscript on Algebra の手稿を献上している。

子息たちの背後にある暖炉や棚の上の陶製の壺など説明できないアトリビュートはまだまだある。恐らく作者の意図は、ピエロ・デルラ・フランチェスカが開拓した絵画であり幾何学、それが弟子のパチョーリや孫弟子となるロムビアジ家の子供達へ伝播し、さらに二人のパトロネージであったであろうウルビーノの貴婦人やパチョーリが修めた宗教についてのアトリビュートであるが、この絵画全体を包む荘厳な冷たさ（各人物の巧妙な動きとは対照的に動こうとしない冷たい静物の表情）は何を意図したものであろう。

### <1994年度パチョーリ関係文献抄>

石山誠一郎訳「フランチェスコ・コマンドヴッチ『ボルゴのルカ・パチョーリ』」

大原学園『スペルート』No. 24, pp. 6-9. 1994.

片岡泰彦稿「『パチョーリ簿記論』の特徴に関する問題点」

雑誌『会計』Vol, 146/6, pp889-902, 1994. 12.

片岡泰彦稿「ルカ・パチョーリの町・わが『ボルゴ・サンセポルクロ』」

雑誌『企業会計』Vol, 46/11, pp131-134, 1994. 11.

岸悦三稿「パチョーリ簿記論の成立」雑誌『会計』Vol, 146/3, pp. 307-322, 1994. 9.

岸悦三稿「パチョーリ簿記論の背景」雑誌『産業経理』Vol, 54/2, pp. 2-11, 1994.

The  ACIOLI  SOCIETY  JAPAN

日本パチョーリ協会 〒112-8585 東京都文京区小日向3-4-14 拓殖大学 商学部 三代川 研究室 TEL.03-3955-8783  
The Institute for Management and Accounting / Takushoku Univ. Miyokawa Office